大賞『ゆきしたにんげん』
雪の圧力によって形作られた空間に小さく住まう建築である、湾曲した壁は屋外にも場所を囲いとり、夏は外も使って大きく暮らす提案となっている。１次のパネル審査では大雪と人間の暮らしのバランスが面白く、模型内観写真が良かったため、より詳しい話を聞いてみたいという気持ちから２次審査に選んだ。平行に並んだ２枚の薄い鉄板が凹凸に成形され、接点をもつことで構造が成立するというアイデアは、この建築の実現性を感じさせる具体的なものであった。建築の形がデザインの恣意性や再現性から逃れられるかというテーマも面白い。そのために頭だけでなく手を動かし、たくさんの模型を作りながら設計を進めたとの事だ。構造的なアイデアが空間や風景につながり、かつ独自性があるとても価値のあるチャレンジだと感じ大賞に選ばせてもらった。私にとってもとても刺激になる作品であった。

優良賞『石垣田の家』
山あいの棚田の風景を取り込んだ家である。階段状の地形が半分、もう半分を建築が補完して家となる。石垣の高さは維持しながら、地面を掘り込むことでプライバシーを確保した点は良かった。既存の石垣を型枠にしてコンクリートでネガポジ反転した腰壁が面白い作り方だと思ったが、２次の質疑でその効果や意味を聞けなかった点は残念だった。棚田を見下ろす勾配方向だけでなく内から外へ連続していく石垣を見る横方向の視線も意識するともっと風景を感じる空間になったのではないかと思う。

優良賞『路の家』
4 つの家が路地をつくり、中央にある洗濯室を共有するシェアハウスである。一人暮らしや少数の家族など、未来の人が集まって住むかたちについて考えさせられる案であった。この案の最大の特徴は動線計画である。各住戸の玄関を入って１２階をつなぐ階段に共用部である洗濯室を配置している。必ず洗濯室を通らないと生活できない動線計画は最初は極端な提案に見えたが、隣人との距離感が近すぎず遠すぎないものになっている。路地に面した開口についてはまだデザインの余地があると感じた。

入賞『変化とともに生きる住まい』
四角い敷地に斜めの路地を十字形に通し、三角形の４つの住宅を配置した計画である。高低差のある敷地で断面的にも平面的にも丁寧に計画された密度の高い案であったが、設計の意図が見えにくい案でもあった。雪だまりを計画の軸にするなら屋根の形を中心に考えるともっと意図が伝わる案になると思う。カフェやアトリエなど表の部屋と寝室や水廻りなどの裏の部屋の配置が、全体の形と掛け算になるように計画できると良くなると思う。

入賞『屋根を纏う住まい』
屋根を「纏う」という言葉の選び方に可能性を感じた案である。急勾配の方形の小屋組が各階に現れているが、断面的なつながりが少なく小屋組の大きさが分断されている。それぞれの生活の場所よりも小屋組がつくる空間の方が大きく感じられる建築にするともっと屋根を纏った場所ができるはずだし、トップライトの光が下の階まで届くはずである。断面計画について、まだまだ設計の余地があると感じた。

全体講評
建築は大きなものから小さなものまで繋がっている。地域の歴史や風景といった大きなスケールのものから、敷地の地形周辺環境、建物外形、構造形式や工法、材料やディテールまで小さなスケールのものまで連続した関係を持っている。その意味で地域の建築のかたちを考えることは面白い。今回のコンペは十日町市・津南町を対象エリアとした 21 世紀の住居というテーマである。「雪や山間の地形にどう応答するのか」「地方都市や町村の人が減少する中で人々がどのような関係を持って暮らすのか」などの課題が作品を通して見えてきた。地域で活動されているナビゲーターの方も交えて具体的な議論ができた事はとても貴重な経験となった。